



# DRAMA かながわ No. 88

Theater Association of Kanagawa March 2023

2022年度 神奈川県演劇連盟合同公演「南総里見八犬伝」  
第20回かながわ演劇博覧会／令和4年度神奈川県演劇フェスティバル  
劇団探訪／資料室だより ほか





# 2022年度 神奈川県演劇連盟合同公演



## 『南総里見八犬伝』

2023年1月19日～22日 神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI

### 【総評】文：仲尾玲二（G/9-Project）

2022年度のTAK合同公演は、コロナ禍による影響を受けず出演者及びスタッフ一同全員健康状態を維持し、5ステージ全てを無事に終えることが出来ました。まずはこの公演を支えて下さった皆様、そして応援していただいた皆様に心より感謝を申し上げます。

本年度は例年お借りしている神奈川県立青少年センター紅葉坂ホールが改修工事期間中（2023年7月末完了予定）のため、スタジオHIKARIをお借りしての上演となりました。

上演作品は『南総里見八犬伝』。曲亭馬琴：作の「南総里見八犬伝」と落語の名作「文七元結」を融合した作品で、脚本をプラスチックな月の福本ぶう之介氏、演出をG/9-Projectの仲尾玲二が担当いたしました。この二人のタッグは2019年度合同公演「主役は江美里Oh!」、2021年度合同公演「西遊記2022」に続く三度目となります。三度となりますとだいぶ阿吽の呼吸になってまいりまして、作品作りは非常にスムーズかつ友好的に行うことができました。

出演者には現役の高校生から大ベテランの方々まで参加していただき、例年以上の盛り上がりを見せてくれました。公演直前でコロナ禍による上演中止を余儀なくされ涙を飲んだ本年度の芝居塾塾生が二名参加してくれたのですが、念願だったスタジオHIKARIの舞台に立つことが出来たと喜びはひとしおだったようです。他の高校生や若者たちにもベテランの方々とは和気あいあいと接していただき、丁寧な指導などをいただき、稽古場はいつも熱気と笑いに包まれておりました。老若男女を問わずフレンドリーにぶつかり合う姿はまるで大家族のような安心感があり、改めて合同でやる公演のメリットを強く感じました。また殺陣の指導・振付や当日制作などを過去TAKに在籍されていた方々にお願ひしたところ快く応じて頂きました。そして作品作りには直接参加頂けませんでしたが、当日受付や場内整理を手伝って頂いた現役TAK会員の方々のお力があつたりと、TAKが今まで培っ

てきたものの底力とありがたみを感じることができた公演となりました。

アンケート回収率は6割を超え、多くの方から好評をいただくことができました。観客の年齢層も幅広く、南総里見八犬伝を読んだことがなかったが興味を持ったので読んでみようと思ったという声、落語に興味を持ったという声、さらには「昔NHKでやっていた人形劇を懐かしく思い出しました」と言った感想もみられました。

後日行われた公演の精算を兼ねた関係者反省会でも、出席された全ての方から「出演して良かった」という声をいただき、終わった公演を振り返りながら笑顔あふれる反省会となった事で、今回の合同公演も大成功だったと実感しました。

来年度の合同公演は改装が終わった紅葉坂ホールをお借りする予定です。より皆が結集し、力を合わせ、関係者と観客、全ての人の記憶に残るような公演になるよう尽力したいと思います。







## 参加者の声

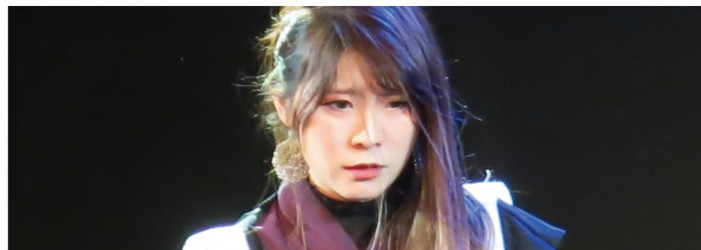
演者として最高に楽しかった「南総里見八犬伝」、お客様にも楽しんでいただけていたら嬉しいです。

実は今回、出演が確定した頃に妊娠がわかり、身重で臨んだ舞台でした。初産で不安もあり、降板した方がいいのでは？皆にも迷惑をかけてしまうんじゃない…。そんな風にぐるぐると悩み、でもここで降りたらもう二度と舞台には立てないかもしれない！と引退試合のつもりで出演を決め舞台に立たせて頂きました。子供も自分のやりたい事も諦めたくない。恐らく大罪達の誰よりも私が強欲だったことでしょう。

悪阻でツライ時期もありましたが、最後まで楽しくこの作品に参加することができたのは、大きな心と愛で守ってくれたキャスト・スタッフの皆さんのおかげです。改めて感謝と喜びでいっぱいです。

引退試合のつもりで…と書きましたが、今回の舞台があまりにも楽しく、またお芝居の世界に帰ってきたい、そんな風に思える作品と仲間に出逢えた合同公演。これからも私のように楽しく演劇の輪が広がる場としてTAKが続いていくことを願います。

文：佐藤花（八犬士【忠】犬山道節役）



## 劇評

### 2022年度 神奈川県演劇連盟合同公演 『南総里見八犬伝』

じりじりとコロナ禍から回復の兆しを見せつつある昨今、久しぶりに観る「生」の舞台となりました。

期待を裏切らない、まさにこれぞ「生」の演劇！という迫力舞台でした。派手なダンス。鬼気迫る殺陣。それらが全員息の合った芝居で所狭しと繰り広げられる！やはり生の舞台は良いものだと思えます。

今回の舞台は紅葉坂ホールではなくスタジオHIKARI。一回り小さい舞台になりましたが、平台を組み上げ、うまく立体的に作り上げ、狭さを感じさせないものでした。客席との距離が近く、臨場感があり、会場の一体感が感じられる舞台が工夫して作り上げられていました。

物語のベースは「南総里見八犬伝」。制作途中で最初に「次は南総里見八犬伝でいきます」と聞いたときには、「ああそれがあったか！」と膝を打ちました。確かに有名だけれども、あまりパロディには使われていない題材。物語はシンプルでわかりやすく個性的なキャラクターたちが数多く登場する。シェイクスピア・オセロ、西遊記と来て、次は南総里見八犬伝。さすが目の付け所が違うなあと感じたものです。

「南総里見八犬伝」は仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の文字のある数珠の玉を持つ八人の戦士の物語、を描く作者の物語という二重の構造。

作者、曲亭馬琴のパートは人情話。江戸時代の仲の良い親子。昔の時代だけれども、確かにそこに生活しているという人物の存在感があり、距離を感じさせない。どの人物もまっすぐで愛嬌が

あって好感が持てます。しかし急転直下、大切な娘が借金のかたに売られてしまう。演技から父親が娘を愛している気持ちが伝わってくるので、何とか必死に金を工面しようとする父親に説得力が出る。父親はこんな時でも人情に厚くまっすぐで、とても応援したくなるキャラクターです。

そんな父親（曲亭馬琴）が必死に書き上げたのが「南総里見八犬伝」。物語の中で戦士たちが所狭しと暴れまわります。殺陣もダンスも非常に息が合っており、合同公演という特殊な形態、さまざまな団体から集まり初対面の人も多量の中、よくぞここまで感服いたしました。あと衣装がかっこいい！まさに和風ファンタジーという感じで、特殊な世界観を見事に表現していました。

物語はこの二つの軸を行ったり来たりしながら進行していきます。飽きる暇を少しも与えない工夫が素晴らしい。欲を言えば「南総里見八犬伝」の中の話をもうちょっと掘り下げて観たかったです。なぜ敵の中に玉を持つ戦士がいたのか。その敵はどういう葛藤を経て、敵を裏切り味方へと寝返ったのか……どんどん想像が広がっていきます。

ラストは大団円。全員での大合唱。このときの皆さんの表情が本当に楽しそう。さまざまな団体から集まった人たちが一つの物を一緒に作り上げ、最後に一体感を得る。これぞまさに合同公演の醍醐味という感じです。魅せられました。パワーがもらえて、観終わった後に元気が出てくる舞台でした。

あらためて良い演劇をありがとうございます。

文：穂村一彦（劇団「無題」）





# 劇評 第20回かながわ演劇博覧会

開催日 2023年3月17日(金)・18日(土)・19日(日)  
会場 神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI



## 【総評】

2004年から開始されたかながわ演劇博覧会。節目となる今回の第20回公演は、全14団体という非常に多くの団体に参加していただくことができました。コロナの状況は以前に比べて緩和されてきたとは言え、出演団体や関係者の健康管理、公演当日の会場内の除菌、そしてご来場いただいたお客様への体温チェックや手指消毒・マスク着用をお願い等、感染症防止対策は昨年に引き続き実施させていただきました。お陰様で無事に終演することができ嬉しく感じています。

入場料につきましては昔と変わらず「無料」としてはいますが、近年は「投げ銭制」を採用しています。こちらは思いのほか好評で、面白いと感じた作品・最良の団体への応援という意味でも、非常に効果的な試みだと感じました。

また、たくさんの団体が参加することにより、お目当ての団体はもちろんのこと、普段観ることがない作品にも出会えたのではないのでしょうか。これからも「神奈川県には素敵な団体がこんなにもあるんだ」と感じていただけるイベント作りを目指していきますので、どうぞよろしくお願い致します。

文：オッスたかのり（劇団かに座）

## ■独騎の会『鶴女房』

「すごいものを見てしまった」という衝撃がずっと残り、今回の演劇博覧会の作品群内で一際異彩を放っていた。『表現者』たちに圧倒され、語り部がいくつもの顔を使い分けていく様は私たちに震わせ、戦争を語る悲痛な声は今も私の耳に鳴り響いている。それはあの小鼓の演奏があったからだ。低く太い声は会場全体に響き渡り、その音色と声が融合した演奏が語り部の声と共に客席に届いてきた。私の背は席から離れて没入していった。



文：久山草太（虹の素）

## ■まりこ☆みゅーじあむ『そこまでも』

平安時代、菅原道真の「飛び梅」伝説に着想を得た朗読劇。舞台上での生演奏とともに道真と件の物語が進んでいく。特筆すべき点として、この作品が平成28年度第4回神奈川県中学校創作脚本コンテスト優秀作品——作者は中学生である。作中の純粋でまっすぐな台詞に胸を打たれた。梅の木を詠んだ歌が重なるクライマックス、件の表情は切なくも美しかった。近所の梅の木にも待つべき主がいるのかもしれない。歴史に想いを馳せるきっかけとなった。



文：里部あずみ（虹の素）

## ■演劇企画ケモノの庭園『ユメミル魔法少女』

人生ハッピーエンドばかりじゃない。記憶の中にある魔法少女のお話とは結末が全く違い驚きました。誰も一度は憧れたことがあるであろう変身シーンは、とてもキュートで子供が見たら確実に真似してしまうでしょう。そして、妖精ポポが現れた時のあの衝撃は忘れられません…。殺陣もあり迫力満点、戦闘シーンは手に汗握りました。この公演が旗揚げとなるケモノの庭園さん。次回作は未定ではありますが、今後のご活躍とても楽しみです！



文：守倉紡（虹の素）

## ■Ghost Note Theater『夜だから眠れない』

開幕から舞台ツラを降りての自転車には既存の枠組から飛び出したアイデアを感じた。コトムラを交通事故で死なせてしまった事を悔やみ続けるゴトウ。ゴトウは靴を履いておらず、ゴトウの頭の中のコトムラは靴を履いている。深く描かれることはなかったからこそ考察を促される場面であった。寂しさをマッチングで埋めるクロネコという女と、娘を失った寂しさを娘程の年頃のクロネコで紛らわせるコトムラ母。それぞれの持つ寂しさを繊細なシーン作りで描く場面は引き込まれ、客席には涙を抑える顔になる人も見られた。



文：宮本悠我（虹の素）

## ■劇団おらんだ『城内換気・清掃』

受付を済ませ場内に入ると、まだ上演開始まで時間があるにもかかわらず舞台上ではすでに芝居が始まっていた。気がつくといつのまにか扉は閉まっており話も進んでいた。正直どこからが本編でどこまでがアドリブ芝居であったのか全くわからない。もしかしたら客入れ中の芝居も台本があるちゃんとした本編だったのかもしれないが、一切それを感じさせないようなナチュラルな芝居であった。演出はとても自由な発想で、これまでの固定概念を覆すような刺激を受ける芝居であった。



文：樹なみ（虹の素）

## ■劇団「無題」『劇団ゲキヤクハようこそ！』

公演に向けた稽古場での雰囲気そのまま舞台上で再現し、これってあるネ！みたいな味わいの作品。脚本家にとっては身につまされるストーリー展開だったろう。だって本番1ヶ月前でまだ台本ができていないという設定だから。舞台自体は多少の粗削りさも見えたが、みんな一生懸命楽しんでいる雰囲気には好感をもった。とりわけ主宰であり脚本担当だった穂村さんの存在感は何とも言えない味わい。とつても個性的でだれも真似できませんねえ。



文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



### ■チリアクターズ『部屋』

ある団地の一部屋。いろんな人間が集まりてんやわんやが展開する。老女がひとり突然死したままトイレの中に閉じ込められ、無人状態となった部屋にコソ泥やら金をだまし取ろうとするギャルやら。そうしたドタバタを、向かいの家の部屋から覗いて様子を見に来た変な主婦。唯一まともと思わせた通いの介護サービス員も結局は金目当て?変な奴、怪しい奴が入り乱れてスピーディに展開する。最後に工事現場の誘導員が警察官に間違われて、部屋に引っ張り込まれ、それが事件を解決に導く。そこで、人にとって大事なことは何なの、との投げかけがあって、これはちょっとお洒落。



文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

### ■劇団Salon de 自由席『今年もあの場所に桜は咲く。』

モチーフであろう東日本大震災。被害に遭われた方々をはじめ多くの日本人の記憶に今も残る。当事者はもちろん、遠く離れた地に暮らす我々にとっても、様々な想いを生み出すきっかけになった。化学物質の汚染により住民が全滅状態となる中で、たった二人生き残った男女の成長と悲惨な記憶からの旅立ちが主題である。主役の二人の男女は中学生から成長～大人になって新たな生命の親となるまでをきちんと演じ分けて見せてくれた。アンドロイド役にちと無理があったようだがテーマは伝わったのではないだろうか。ほっとする気分を味わわせてもらった。



文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

### ■MMTパントマイム『パントマイムソロ・アンサンブル』

パントマイムとは独りで演ずるものとの認識があったが、本作品は複数の役者が状況設定の中で芝居として絡むことで新鮮な劇的空間と時間を与えてくれた。軸となる演者と経験の浅そうな出演者が絡む。動きや演技には確かに差が見られたがそれを比較して論ずるのは意味のないこと。楽しそうに皆さん演じていたし、リーダーがそれとなく心遣いをしているのが、とても優しくほっこりとさせていただけだ。いい舞台を見させていただけだと思う。台詞はないのだが、何故か演者同士が語り合っているように感じたのが素敵。



文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）

### ■ヤニーズ『キョウ ダイジ。アシタモ ダイジ。』

どんな話が始まるんだろうと不思議な気持ちになり、オープニングから引き込まれてしまいました。障害を持つ妹、その姉、そして母親とその同級生の男性2人を軸に物語が展開されていく。妹に対する想いがそれぞれの立場で描かれる場面では、好きという言葉の重みに胸がギュッと苦しくなり、涙が溢れました。妹が姉にはっきりと言葉を残していくシーンが印象的で感動的である一方、どこかに闇を孕んでいるようで鳥肌が止まりませんでした。



文：新菜鈴果（虹の素）

### ■劇団年輪『decade』

数年ぶりに集まった同窓生が閉じ込められた。そして5年前亡くなった少女が幽霊になり現れ、恋のライバル同士の展開が始まるかと思いきや、どこか心温まるストーリー。就職・夢・恋人、選択を迫られることが多すぎる二十代、自分ごとのように突き刺さり、それぞれの人生や想いが交錯し、共感しながらも、ラストの少女が主人公の背中を押して消える所では残された側の重みを感じつつ、これから彼女とどう歩んで夢を手に入れていくのか彼の人生を応援したい気持ちになりました。



文：新菜鈴果（虹の素）

### ■劇団カレーライス『JK×JK』

主人公のJK（女子高生）とおっさんであるJK（ジャパン仮面）の入れ替わりから始まるこの作品は、終始コメディ調で進んでいく。入れ替わるのは年齢も性別も違う二人であるが、細かく丁寧な所作は入れ替わりを現実のものに感じさせていた。中盤まではおじさんの中にJKが入っているという絵面や内容の面白さから終始笑っていたが、ラストには主人公の悩みであった叔父との関係が改善していく展開が待っており、主人公が涙ながらに叔父への想いを語るシーンではその表情と声に思わずこちらも涙を流してしまった。



文：日向ひなの（虹の素）

### ■演劇企画ティータイム『霧晴れを望むティータイム』

不老不死とそれを取り巻く世界を描いた物語。ミュージカルの形で歌が入ることにより心情がより伝わってきたり、楽しさが共有できたりと、心動かされる作品になっていた。特に心に残ったのは館の主ローズマリーとそれに仕えるシャルムの別れのシーンだ。丁寧な心理描写、序盤に描かれる出会いのシーンと同じ曲。まるで走馬灯のように感じ、魅入ってしまった。また、今作はシリーズ作品の一部であり、この先を思わせるラストは今後の公演への期待が高まる終わりとなっていた。これからの活動にも注目したい。



文：日向ひなの（虹の素）

### ■劇団さめと放課後。『アイドル☆誕生』

今回が旗揚げ公演のこの団体は、元は演劇部の顧問と教え子だ。卒業後にこうして共に公演を打てる関係性に充実した青春の日々を感じる。そんな青春の延長に在るような、芸人を目指す女子コンビの物語。仕事への取り組み方、姿勢というものを強く感じた。物語こそ丸く収まる結末を迎えるが、きっと現実はそうもいかない。ウケを狙う女子達の漫才や日常会話に対し、お笑いを本業にしていない役を演じる男性陣の芝居に客席が沸いたのもどこか示唆的だった。社会に出ていく教え子たちに、何事にも真摯に取り組む姿勢の大切さを、先生の演劇への熱を通して強く感じた。



文：猪熊竜久馬（虹の素）



# 令和4年度 神奈川県演劇フェスティバル 劇評

演劇プロデュース『螺旋階段』「RAIN ～改訂版～」  
2022年12月23日～25日 小田原市生涯学習センターけやき



2022年のクリスマスシーズン真っ最中の12月23日、気温10度を下回る小田原の街での観劇だった。

この作品は演劇プロデュース『螺旋階段』の旗揚げの演目であり、なんと16年ぶりの再演だという。旗揚げ公演から改訂しているが、初演に出演していた4人のメンバーは当時と同じ役を演じている。

舞台は初演時と同じく2006年12月、暴風雨に吹き飛ばされてきた男が探偵事務所にたどり着く。男はなぜそこに飛ばされてきたか分からず、探偵は男に依頼を受け、男の正体に迫っていく・・・と、あらすじはシンプルだが、そこは売れない探偵事務所。

浮気調査を依頼するカップルや事務所の大家さん、といった一クセも二クセもある登場人物がシーンをかき回す。そして男の正体と目的が分かってくにつれ、身元調査かと思われた物語は時空を超えるSFファンタジーの様相を呈してくる。盛り沢山で遊び心にあふれた劇作だ。

スタッフワークも充実しており、特に大道具が素晴らしい。暗転から一瞬での探偵事務所への転換、そして出てきた探偵事務所の細部までの作り込みに舞台美術家の繊細さと大胆さを感じる。また、劇中あっと驚く道具が登場し、思わぬアクションシーンに展開するところなど声をあげて笑ってしまった。心の中で「どこに金かけてるんだよ！」と突っ込んでしまった。

「第1作にはその作り手のすべてが詰まっている」とよく言われる。作・演出の緑慎一郎さんの芝居は数多く観劇しているが、16年前に書かれたというこの戯曲には現在にも通ずる緑さんの面白がっていること、人間のとらえ方、演劇観が詰まっていた。20代の緑青年の若さは感じたが、古さは全く感じなかった。

若さというのは決して「青臭い」という事ではない。自分が面白いと思っていることをストレートにぶつける勇気とパワーだ。初演時の熱量を感じた。

そして古さを感じなかったのは、16年という時の流れのなかで緑さんがセンスを磨き続け、技術をアップデートし続けてきた証拠である。

「旗揚げ公演の再演」という、ともすればセンチメンタルに振られてしまいそうな演目を上演することは、過去の自分との戦いだったことだろう。初演を見ていない観客にとって作り手側の「青春プレイバック」は、乱暴な言い方をすればどーでもいいことなのである。

思い出と勝負した螺旋階段は、新たな解釈とアップデートされた演出で、年の瀬に清々しくも温かい演劇を見せてくれた。

文：中山朋文 (theater 045 syndicate)

劇団こゆるぎ座「日本開國哀話 唐人お吉」  
2023年2月25日～26日 小田原三の丸ホール 大ホール

「唐人お吉」私はその名をこの舞台を観劇するまで知りませんでした。幕末の日本に実在したお吉は、日本開國の中心となった伊豆・下田にて初代駐日総領事として着任したハリスの傍へ仕え「らしゃめん」と卑しめ蔑まれ短い生涯を無残にも終えた。今回の舞台はそんなお吉の人生を描いている。

まず会場である「小田原三の丸ホール」の熱気に驚いた。千人程収容できるホールに沢山の観客が訪れ、受付近くでは会場案内する係の方の元気な声が響き、とても気持ちよく入場することが出来た。こゆるぎ座第69回公演ということで、地元小田原で確かに築いてきた信頼と実績によってこの熱気を帯びた光景が実現しているんだと感じました。

舞台セットもしっかりと作り込まれていて、幕末の世界観に集中して入り込むことが出来ました。

そんな環境下で観劇をしていく中で、アメリカ・日本・そして下田の住民の思惑や差別に翻弄され苦しみ惨めに死んでいったお吉の人生に思いを馳せました。

お吉がなぜそんな惨めな末路を歩まなくてはいけなかったのだろうか。誰の責任なのか。お吉を利用した幕府や討幕派なのか。お吉を差別し罵った下田の住人なのか。それとも、お吉自身なのか。正直私の中で答えは出ていません。きっとこの人の責任だと決めつけることは出来ないし、それは何も生み出さないだろうと思います。ただあるのは惨めな末路をお吉は辿っていったという事実。そんな不条理です。そしてこの舞台はそんな不条理をしっかり描き表現していった舞台だったと思いますし、それは時を超え現在の社会にも響く想いだと思います。その反面大きな盛り上がりがなく淡々と物語が進行していったと感じました。お吉の人生を丁寧に描いていく為にそうなったんだと思いますし、実際に丁寧に描かれていたと思います。そのバランスに難しさを感じました。

しかし、演技や表現力などは素晴らしく、特に波乱の人生を歩んだお吉を演じた、奥津真理子さんとお吉を波乱の人生に巻き込んで行った下田奉行所・差配役の伊佐新次郎を演じていた野村信太郎さんの熱演が光っていました。

他の役者の方々もいきいきと演じていて、お吉の人生に思いを馳せることが出来る舞台がしっかり作られていて、地元小田原で地道に活動を続け信頼を得て愛され表現したい想いが客席に届く確かな舞台を作る。そんなこゆるぎ座さんの強みを感じた舞台でした。

文：ジャイアント田村 (プラスチックな月)





2023年4月より12ヶ月連続公演に挑む虹の素。横浜にある架空の高校「県立横南高校」を舞台に、廃校前最後の1年を描く連作青春群像劇。俳優は1年を通して同じ役を演じる。その第1弾となる、TAK in KAAT 『フリーゲルの風』『アインブラットの本』の上演を控えた劇団員・出演者に、そのチャレンジ的な公演について話を伺った！



ー 12ヶ月連続公演というタフな道に乗り出した経緯は？

主宰・演出／猪熊竜久馬：4月に上演するのは2013年に上演した作品です。その後「雨上がりには好きだといって」というシリーズ化して同じ学校を舞台に月ごとの作品を発表していきました。それから毎年作り続け、10年の節目の最終作を上演するために今まで作ってきた月ごとの作品を順番に並べないと横南高校は終われないと思ったのがキッカケとなりました。



ー 10年経過して作り手としての変化はありますか？

猪熊：2013年は東日本大震災から2年後で、当時の影響が作品に大きく反映されていました。原発のことや復興のこと、何が正解なのかどう向き合えばいいのか、といったことが作品の根底に流れていた気がします。それから10年経過した現在、コロナ禍に見舞われ、やはり何が正解なのかどう向き合えばいいのかを悩んでいます。



劇団員／木之枝棒太郎：震災の時は考え方や捉え方に差はあったけど、みんなが同じ方向を向いていたような気がします。でもコロナの場合は考え方の対立や分断のほうに進んでいっている気がして…。

猪熊：コロナがあってみんながあちこちに散ってしまった感があります。演劇から離れていった人も多く、学校でも集まらない。そこに等しくあったであろう「青春」が失われてしまった。学校という場所は合う人も合わない人も、運動部も文化系も、陰キャも陽キャも一つの場所に集まって同じ時間を過ごしていた。今になって思えば、とるに足らないちっぽけなことで悩んでいた。その時間を単純に懐かしむということではなく、ちょっとだけそこに立ち返ることも必要だな、と思うようになりました。

木之枝：震災の時は、みんながつながろうとしていた。でもコロナは逆で、物理的にも精神的にもみんな離れようとした。だからこそ失われた青春を振り返ることで、また集まればいいのかと思っています。

ー インタビューには劇団員の遠藤由実さん・守倉紡さん、そして出演者の佐藤晴伽さんも参加してくれた。3人とも10代～20代前半の若き演劇人だ。1年を通して同じ役と向き合う俳優たちに思いを聞いた。

遠藤：自分の役を1年間続けていく上で、最初の登場作である4月の作品は本当に大事に作りたいです。役を任される責任とこだわりを持って12ヶ月を過ごしていきたいと考えています。



守倉：私は4月編と1月編に出るのですが、間が空くからこそ見せられる時間の流れがあると思います。見に来るお客さんに、自分がどう変わりどう成長するかを見せたいと思っています。

佐藤：自分は仮面ライダーが大好きで1年を通して演じ続けることに憧れがありました(笑)。1年間演じ続けるというのはとても贅沢で、その間大事に温め続け最終話にぶつけるのが自分なりの挑戦だと思っています。



ー 猪熊さんと木之枝さんは10代のころから共に芝居を作り青春を過ごしてきた。30代に突入した今回、大勝負に出る二人に意気込みを聞いた。

木之枝：僕は初演版も出演しているし、他の作品にも出ていて、どの作品にも思い入れがあります。当時は12ヶ月連続なんてことはとても思いつけなかった。でもコロナ禍でつらい高校生活を過ごしたみんなに、ちょっとしたご褒美じゃないですけど、この機会を存分に楽しんでほしいと思っています。今だからこそ一丸となって神奈川の演劇シーンを盛り上げるような作品にしていきたい。虹の素だけではなく、地元で頑張る演劇人たちを応援していただけるような作品をお届けします！

猪熊：横浜市内の様々な場所で上演します。これをきっかけに盛り上がりつつつながりを作りたい。この企画は僕にとっての青春の一区切りだと思っており、これが終わったら演劇やめてもいい覚悟で臨んでいます。1年かけてつくり上げた作品のラストに相応しい終わりを迎えて見せます！

木之枝：同じく！人生かかってます！！

彼らの熱意に触れ、俄然若者たちの「青春」の行く先を見届けなくなった。12ヶ月後、彼らは確実に成長しているだろう。そしてその成長を見届ける私たちが見る世界も変わるような、明るい未来を感じられる公演になることだろう。「青春」は甘酸っぱいだけでなく、苦かったり、思い出したくなかったりする。しかし「青春」は誰の内にもあり、形を変えながら一生続くのだ。

聞き手：中山朋文 (theater 045 syndicate)

『雨上がりには好きだといって』

12ヶ月連続公演

公演詳細につきましては、  
虹の素HPでご確認ください。  
<https://www.nijinomoto.com/>





# 資料室だより

## 【修理担当からのお願い】

まず私が演劇資料室のお手伝いをするようになったきっかけから。だいぶ前の話ですが、就職し、少しお金が使えるようになったときに、ミュージカル『レ・ミゼラブル』を鑑賞しました。それにドはまりして、通算20回以上鑑賞しました。そして、どんな形でもいいから演劇にかかわりたいと思い、でも仕事が忙しく子育てもあるため、演劇は殆ど観るだけのものでした。

あるとき神奈川県広報に演劇資料室のボランティア募集の記事が載り、応募しました。青少年センター・多目的プラザが「スタジオHIKARI」と命名された年です。

最初は火曜日に、最近は不定期に入室し、主に資料の修理を行っています。私の本業は図書館司書ですので、図書館での修理の仕方です。資料の中には古いものもあり、触るだけでポロポロと破けてしまうようなものもあります。そういうものの修理は学芸員が修理した方がよいと思うのですが。

私より前から修理をされている方や資料を借りられる方にお願ひがあります。破れがあるものや新しく破ってしまった資料については、セロテープなどを貼らないで「修理が必要」と教えてください。セロテープは劣化しますし色が変わってしまいます。はがすのも大変です。

また演劇資料室の資料は貸し出しもしますので、できたらあらかじめ貸し出しに耐えうる装備をしたいと思います。本来ならば

ブッカーまたはブックコートと呼ばれるフィルムを貼るとよいのですが。古いものは古いまま封じ込めてしまうので、新しいときに装備したいです。

現在は、背タイトルが読みにくい台本の背タイトルを作成し、団体ごとに整理し始めているところです。

ボランティアに入っている時間帯に一人の利用者もないことがままあります。もっとたくさんの方々にご利用していただきたいです。資料室に気軽に入っていだけるような場所になるよう、今後も活動していきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

文：伊藤禎子（演劇資料室当番）



## 演劇資料室

### 【開室時間】

平日（火曜～金曜） 13:00～22:00（貸出は21:30まで）

土曜・日曜・祝日（月曜以外）10:00～22:00（貸出は21:30まで）

### 【休室日】

月曜、年末年始

※上記以外にも休室日がございます。ホームページをご確認の上、お越しください。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485

## 今後の事業・公演予定

- TAK in KAAT 虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.1フリーゲル風の風/Vol.2アインブラットの本 2023/4/20～23、KAAT神奈川芸術劇場(大スタジオ)
- 虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.3リヒトの色 2023/5/20～21、杉田劇場
- 演劇プロデュース『螺旋階段』『夢見る無職透明』2023/5/26～28、神奈川県立青少年センター・スタジオHIKARI
- 虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.4オルテンシアの種 2023/6/17～18、あーすぷらざ
- 虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.5ダーフォの国 2023/7/6～7、テアトルフォンテ
- 劇団横濱にゅうくりあ『イセプラは港へ続く分かれ道』2023/7/15～17、STスポット横浜
- 劇団河童座『プレーメンの音楽隊』2023/8/19～20、横須賀市立青少年会館3Fホール
- 2023年度芝居塾（ビギナークラス）『オズの魔法使い(仮)』2023/8月中旬～下旬、山手ゲーテ座ホール(予定)
- TAK in KAAT 演劇プロデュース『螺旋階段』『血の底』2023/8/24～27、KAAT神奈川芸術劇場(大スタジオ)
- 虹の素『雨上がりには好きだといって』Vol.6オリキュレールの糸 2023/8/26～27、あーすぷらざ

## 神奈川県演劇連盟加盟団体（50音順）

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ■京浜協同劇団 ■劇団蒼い群 ■劇団河童座 ■劇団こゆるぎ座 ■劇団砂からマカロン
- 劇団820製作所 ■劇団「無題」 ■劇団横濱にゅうくりあ ■theater 045 syndicate ■G/9-Project ■虹の素
- プラスチックな月 ■マシユマロ・ウェーブ ■まりこ☆みゆーじあむ ■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
- 横浜小劇場(横浜演劇研究所附属) ■ヨルノハテの劇場

## DRAMAかながわ 88号

【発行】神奈川県演劇連盟（2023年3月31日）

【編集】オッサたかのり（劇団かに座）、吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）、穂村一彦（劇団「無題」）、  
緑慎一郎（演劇プロデュース『螺旋階段』）、野比隆彦、波田野淳統（劇団820製作所）、  
中山朋文（theater 045 syndicate）

【ホームページ】<http://kenenren.org/>

